

I. 雨よけ栽培小ネギ

1. 特別栽培に対応する総合防除体系

佐賀県特別栽培農産物認証制度に対応した小ネギ病害虫の総合防除体系（例）

時期	8～10月(夏季～秋季)			化学合成農薬の有効成分	
栽培作業	播種前	生育期～収穫期			
基幹防除 (物理的防除)	近紫外線除去フィルム	アザミウマ類、ハモグリバエ類のハウス内への侵入を防ぐために天井部分に被覆する。			
	目合い0.6～0.8mm防虫ネット	アザミウマ類、ハモグリバエ類およびチョウ目害虫のハウス内への侵入を抑制するために、サイドだけでなく、出入口等の開口部すべてに設置する。なお、気温が高い場合は下温対策として、天井部分に寒冷紗を被覆する。			
防除時期	初期防除		隨機防除		
薬剤防除	ネギアザミウマ ネギハモグリバエ シロイチモジヨトウ	圃場内を観察して、害虫の発生が認められ、被害が拡大するようであれば、防除を実施する	秋季はチョウ目害虫の発生が多くなるので、圃場内を観察し、幼虫・卵塊を捕殺するとともに、被害が拡大するようであれば、防除を実施する	2	
		ネギアザミウマ ネギハモグリバエ シロイチモジヨトウの場合	ディアナSC 2,500倍		シロイチモジヨトウの場合 トルネードエースDF 1,000倍 または フェニックス顆粒水和剤 2,000倍
		ネギアザミウマ ネギハモグリバエの場合	スタークル顆粒水溶剤 400倍 株元灌注 0.4L/m ²		シロイチモジヨトウ ネギアザミウマの場合 プレオフロアブル 1,000倍 または スピノエース顆粒水和剤 2,500倍 (スピノエースのシロイチモジヨトウに対する登録は5,000倍、ネギアザミウマは2,500～5,000倍)
雑草	スベリヒユ等	雑草は害虫の発生源となるので、こまめに除草する。		1	
病害	根腐萎凋病・萎凋病 (土壌病害)	土壌消毒 (バスアミド 殺菌剤等)	生育期における茎葉部病害の発生は極めて少ない。		
化学合成農薬の有効成分	1	1	1	3	

2. 総合防除体系の時期別のポイント

- 1) 本防除体系は、無加温の簡易フィルムハウスによる雨よけ栽培の小ネギ（3～5作/年）を対象としている。
- 2) 本防除体系は、生育期～収穫期が夏季～秋季（8～10月）、晩秋季～翌年春季（11月～翌年4月）に該当する作型を対象としている。これは、夏季～翌年春季における害虫の発生は認められるものの、本体系に準じた減農薬栽培が可能である一方、初夏～夏季（5～7月）は害虫（特に、ネギアザミウマ、ネギハモグリバエ）の発生が極めて多く、被害を抑制するためには薬剤防除を徹底することから、本体系の実施は困難な場合が多いためである。
- 3) 本防除体系は、病虫害の効果的な防除と薬剤抵抗性の発達遅延を考慮している。すなわち、減農薬栽培を目的としてハウス内への侵入を抑制する物理的防除資材の使用、害虫の発生源となる雑草の除去および薬剤防除を総合的に組み合わせている。薬剤防除では、発生している病虫害の種類を基にして、使用薬剤を選択する方式とし、同一薬剤の連用を回避するように策定している。

4) 8～10月 (目標成分 3回以下)

注意する害虫：ネギアザミウマ、シロイチモジヨトウ、ネギハモグリバエ

- (1) 基幹防除として、近紫外線除去(波長380nm以下の光を除去)フィルム(以下、UVAフィルム)および防虫ネット(目合い0.6～0.8mm)を必ず使用する。
- (2) 8月上中旬は高温のために害虫の発生は少ない。気温が低下し始める8月下旬以降はネギアザミウマ、ネギハモグリバエ、シロイチモジヨトウの発生が多くなる。
- (3) 害虫が発生し、被害が拡大する場合、発生種により薬剤を選択して、初期防除を徹底する。ネギアザミウマ、ネギハモグリバエおよびシロイチモジヨトウが発生している場合はディアナSCを散布する。ネギアザミウマとネギハモグリバエが発生している場合はスタークル顆粒水和剤を株元に灌注する。なお、茎葉への散布剤は、薬液の植物体への付着をよくするためにスカッシュなどの展着剤を加用する。展着剤の加用は他の害虫防除時においても同様である。
- (4) その後はシロイチモジヨトウ、ハスモンヨトウが多くなるので、本虫の防除を主体として、その他に発生した害虫により薬剤を選択する。シロイチモジヨトウのみが発生している場合はトルネードエースDFまたはフェニックス顆粒水和剤のいずれかを散布する。本種とネギアザミウマが発生している場合はプレオフロアブルまたはスピノエース顆粒水和剤のいずれかを散布する。シロイチモジヨトウとネギハモグリバエが発生している場合はプレバソンフロアブル5を散布する。
- (5) チョウ目害虫は、フィルムや防虫ネットにも卵塊を産み付けることが多い。孵化したばかりの若齢幼虫はネットの空隙から侵入するので、圃場観察を必ず実施し、フィルムおよび防虫ネット上の卵塊は必ず除去する。
- (6) 雑草、根腐萎凋病・萎凋病対策として、バスアミド微粒剤等による土壌消毒を必ず行う。地温が高いこの時期の薬剤による土壌消毒は特に有効である。
- (7) その他に防除対策が必要となるような病害の発生は極めて少ない。
- (8) 防虫ネットの設置によりハウス内の気温が高まるので、天井部分に寒冷紗等を被覆する等して、下温に努める。
- (9) ネギアザミウマに対するUVAフィルムのハウス内への侵入抑制効果は被覆2年目以降低下する傾向にあるので、被覆2年目を経過したフィルムを使用する場合には本種の発生動向を観察し、被害が高まる場合は早急に防除する。

5) 11月～翌年4月 (目標成分 3回以下)

注意する害虫：ネギアザミウマ

- (1) 基幹防除であるUVAフィルムおよび防虫ネットは必ず使用する。
- (2) 気温の低下にともない、害虫の発生は翌年2月頃まで極めて少なく推移して、気温が徐々に高まる3月以降になると、ネギアザミウマの発生が増えてくる。
- (3) 防除は、ネギアザミウマが発生した場合に実施する。使用する薬剤は、アザミウマ類に高い防除効果が期待できるディアナSCまたはスピノエース顆粒水和剤を選択する。
- (4) 雑草対策として、バスアミド微粒剤等による土壌消毒を実施する。

(5) 防除対策が必要となるような病害の発生は極めて少ない。

6) 5～7月

本時期は、一年のうちでネギアザミウマ、ネギハモグリバエの発生が非常に多く、UVAフィルムと防虫ネットを設置した場合でも、ハウス内への侵入数が多い。そのため、薬剤による防除を徹底する必要がある、化学合成農薬の有効成分数が4成分以上になる場合もあるので、本時期の特別栽培は困難である。